

名大醫學部學友時報 2018 1

目次

1. 謹賀新年 (1)	5. 第30回日本医学会総会 2019 中部に向けて	齋藤 英彦 (10)
2. 新年のご挨拶	松尾 清一 (2)	6. 第30回日本医学会総会 (11)
	門松 健治 (3)	7. 謹賀新年 (12)
	石黒 直樹 (4)	8. クラブ活動報告	陸上競技部 (16)
	吉川 史隆 (5)	9. 新春後記 (16)
3. 臨床教授のひとつこと	内田 一生 (6)		
4. 新春随想	坂本 純一 (7)		
	加藤 岳人 (9)		

謹賀新年



諸井 條太郎先生 撮影

新年のご挨拶



新年のご挨拶

名古屋大学総長 まつお 松尾 せいいち 清一



新年あけましておめでとうございます。名古屋大学医学部学友会の皆様には、いつも大変深いご理解と温かいご協力をいただいております、名古屋大学総長として心から感謝申し上げます。

早いもので、私も総長を拝命してから3回目の新年となります。「光陰矢の如し」、まさにその思いを強くしています。同時に、「少年老い易く、学成り難し」といいますが、今のペースでは「学」（私の立場では「大学改革」）が成るどころか、沢山の課題を残したまま任期を終えてしまうような気がしています。総長任期は6年ですが、外部委員を含めた総長選考会議により4年目に中間評価を受けます。従って4年が一つの区切りであると考えたとあと1年余りしかなく、総長就任時に公表した目標であるNU MIRAI 2020 (Nagoya University Matsuo's Initiatives for Reform, Autonomy and Innovation by 2020) が達成できるよう、今年は大学の改革を一層加速したいと決意を新たにしています。

鶴舞地区あるいは大幸地区では大学本部・メインキャンパスと距離が若干離れている関係もあり、様々な情報、しかも刻々と変化する情報を共有し、志を同じくして名古屋大学を世界屈指の大学にするため、日常的に十分なコミュニケーションを図る努力が必要であると思います。その意味で、昨年4月から理事として大学執行部に加わっていただいた高橋雅英理事・副総長（前医学系研究科長）には、本部と医学系研究科を結ぶ重要な役割を期待しています。門松研究科長、石黒病院長、小島保健学科長と力を合わせて、名古屋大学における医学・医療の領域での世界トップレベルの研究の推進、医学・保健教育の充実、先進医療の開発、高度医療の実践に邁進していただきたいと思います。そして教えるもの、学ぶもの、それを支えるもの、様々な立場にある人たちが名

古屋大学と一緒に活動することを誇りにできるような環境を作り上げることが重要であろうかと思っています。

近年、領域融合型の研究が重視されています。すなわち、単一の領域だけでなく複数の異なる分野の研究者が共同して新しい研究成果を挙げてゆくもので、名古屋大学の中でも世界トップレベル研究拠点事業における名大拠点 ITbM (Institute for Transformative Biomolecules、トランスフォーマティブ生命分子研究所) では、生物学、合成化学、イメージング科学などの研究者が、一つ屋根の下の壁のない環境で共同研究を進め、素晴らしい成果を挙げています。私は医学研究も当然、このような融合研究の格好の場であると考えています。ぜひ研究科を挙げて斬新な融合研究の場づくりを目指していただければと思います。その意味では、来年度から文科省で計画されている卓越大学院への挑戦をぜひ進めていただきたいと思います。

さらに、病院機能の飛躍的強化を図るための新しい建物（中央診療棟B）の建設にあたっては、石黒病院長はじめ病院関係者のチームワークと努力に対して心から感謝しています。これを機に、大学病院ならではの高度医療の提供、次世代を担う医療人の教育と養成、さらには様々な分野や企業との連携による研究開発、などがダイナミックに展開されることを期待しています。

教育面では、医学系研究科のジョイントでグリープログラム (JDP) がアデレード大学に引き続きルンド大学との間でも開始されることになり、フライブルグ大学とも現在交渉中とのことです。世界の一流大学との間でこのように次々とJDPを進めているのは名大のみであり、中でも医学系研究科はトップを走っています。また、保健学科を中心とした保健学分野の教育にかかわる国際交流も着実に進められており、今後一層の発展を期

待しています。一方で、保健学分野の研究や人材育成についての将来像をぜひ明確にさせていただき、新しい時代に向けた保健学科の挑戦を期待したいと思います。

2018年(平成30年)は干支でいえば戊戌(つちのえいぬ)の年で、その特徴は、①他人とのコミュニケーションが上手なこと、②家族や友人に対して細かな気配りができること、③先見性があるのと同時に自立心の強いこと、④リーダーシップと行動力を併せ持っている

が、縁下の力持ちのようなこともでき努力を惜しまないこと、だそうです。協調性と柔軟性を併せ持っているため困難な状況でも決してめげずにやり遂げる力を持っているということで、まさに今、名古屋大学に求められているキャラクターだと思います。私もぜひこのような人間になれるよう、皆さんと一緒に前に向かって進みたいと思っています。最後に私の座右の銘を記します。

「安定は動の中に在り」



新年のご挨拶

名古屋大学医学部長・医学系研究科長 **かどまつ けんじ 門松 健治**



新年あけましておめでとうございます。学友会の先生方にはよき初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年4月に学部長・研究科長を拝命して以来、県・市、医師会など関わる範囲の広さに驚きましたが、多くのご助言もいただき少しずつ仕事を覚えてきました。とはいえ、名大医学部・医学系研究科をよりよくすることが本来の使命であり、そこからしか上記の公的な仕事への信頼感も生れないだろうという思いもありました。

昨年11月にGAME(Global alliance of medical excellences)と名づけた医学部の国際連携組織が名大と香港中文大学(香港)、ミュンヘン大学(ドイツ)、モナッシュ大学(オーストラリア)、ロッテルダム大学(オランダ)、ボローニャ大学(イタリア)、ノッティンガム大学(イギリス)、アルバータ大学(カナダ)、高麗大学(韓国)の9校の間で作られ、その第1回の会議が香港で行われました。同じ11月には、我々にとってアデレード大学(オーストラリア)、ルンド大学(スウェーデン)に次いで3校目のJDP(Joint degree program)の締結のためにフライブルグ大学(ドイツ)を訪れ、隣のストラスブール大学(フランス)でも議論を交わしてきました。これらの大学はいずれ劣らぬ名門校です。我々は教育・研究で大きな刺激を受け、また、協調により互いに成長できると期待されます。今回の11月の2つの会議で強く感じたのは、このレベルの大学になるとどこも、基礎・臨床両方の研究に力を入れていること、研究力や教育力を数々の客観的データを基に把握しようとしていること、そしてphysician scientistsの育成が共通の目標であること、の3つでありました。

国際化とはすなわち己を見直す機会が広がることであり、名大の研究力、教育力を見直す基盤を与えてくれま

す。問題は、本気で見直す気があるのかどうかです。「指定国立大学」に象徴されるように我が国の大学は歴史的にも極めて大きな変革期を迎えており、我々医学部の変革もまったなしです。幸い、自分たちの強み、弱みが正確に捉えられるようになりましたので、これからは医学部メンバーと希望と危機感を共有して前進したいと思っています。なお、このたびの指定国立大学の提案では、名大は世界的研究拠点として4つの重点分野を挙げております。すなわち、化学・生物学融合分野、LED分野、素粒子・宇宙科学分野、そして生命科学分野です。医学はまさに生命科学の核となるのであり、我々にはそれを担う誇りと責任があります。

さて、名大は1871年仮病院・仮医学校として発足しました。2021年には創基150周年を迎えます。今年を入れて3年が準備期間となります。医学部では、学術的成果も含めた名大医学部歴史年表を作成すべく、高橋昭名誉教授の監修の下、作業を開始しております。その第1版は今年の学友大会でご披露し、上々の評判でありました。また、学友会では、名大医学部を象徴するネクタイとスカーフを作り、学友大会をはじめ同窓会ではそれを身に付け連帯感を深めようではないか、と議論がまとまりました。ただ今、そのデザインを準備中です。また、名大基金の傘の下に、昨年からは医学系未来人材育成支援事業と銘打った基金を立ち上げました。既に学友会の多くの先生方からは多大なるご支援をいただき、誠にありがとうございました。この基金は、外国と比べて支援の薄い学部学生・大学院学生の教育・研究の支援のために使わせていただきます。一定額以上の支援者には銘盤に名を刻んで謝意をあらわします。

2019年4月には齋藤英彦名誉教授を会頭とする日本医学会総会2019中部が開催されます。第30回の節目と

なり、名古屋では24年ぶりとなる総会であります。医学の最前線から医療制度、国際化まで面白い講演と展示が目白押しです。この2月から早期登録も始まります。登録費が割安となるだけでなく、産業医、スポーツ健

康医などの各種単位取得のための登録が優先的に受けられます。是非、お早めに登録ください。

今年も何卒、昨年と変わらぬご指導とご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。



新年のご挨拶

名古屋大学医学部附属病院長 いしぐろ 石黒 なおき 直樹



新年 明けましておめでとうございます。学友会の皆様におかれましても良いお年を迎えるの門出であることを祈念しております。新たな年を迎えるにあたり、昨年中の名古屋大学附属病院に対するご支援にお礼を申しあげると共に、今年も変わらぬご鞭撻をお願い申し上げます。

ほぼ毎年の話になり、恐縮ですが今年も病院の経営にとって厳しい年になると予想されます。4月の診療報酬と介護保険の同時改定に向けて議論が進んでいますが、急性期病院にとってあまりいい話は聞こえてきません。確かに社会保障という枠で考えれば、高齢化に伴う介護保険全体の抑制は困難である以上、医療保険、とりわけ診療報酬の抑制が必要であることは理解できます。一方で、大学病院を含め、多くの公立病院の経営が非常に厳しい状況にある事が、社会にあまり理解されずにいることは残念なことです。医療の高度化には目を見張るものがあります。しかし、それに合わせて病院全体の機能を高めるには設備の更新が必要になります。現在は更新計画を抑制することにより、赤字転落を免れていますが、それがいつまで続けられるか疑問です。新たな年を迎えて少しでも状況が好転することを願うばかりです。

今年、名大病院にとって良い話題もあります。まず中央診療棟B（旧来は機能強化棟と呼んでいました。）が稼働を開始します。全ての機能がすぐにフル稼働することは体制的な負担が大きいものですから、今年1月以降順次稼働を開始し、全体の効率向上に取り組む事になっています。この新たな中診療棟はがん診療の強化を目的の一つに置いています。高齢化に伴いがん患者の増加が起こるとされています。名大病院においても手術治療を含めて化学療法、放射線療法の需要が飛躍的に増加すると考えられます。実は既に名大病院はがん治療では市内一位の診療実績を誇ります（DPCデータに基づく）。手術症例では二位との差が更に明確となります。今回の中央診療棟Bは各種の集学的治療の強化を可能とするものです。がん治療は今後、ゲノムデータに基づく精密医療

(precision medicine) の方向に向かうと考えられます。全ての疾患治療について精密医療という考え方が今後の主流となると思い、それに向けての体制構築に注力します。地域ナンバーワンのリーディングホスピタルであり続けるためにもこの活動は必要と考えています。

もう一つの報告があります。現在名大病院は病院のIoT化を進めています。私どもはSmart hospital構想とこれと呼んでいます。今回 手始めとして夜間の搬送用ロボットを豊田自動織機と共同で開発しました。実地での試験運用を開始しています。障害物の回避など様々な課題がありますが、ヒトとロボットが共存する社会が必ずくるものと信じています。それに向けて我々自身が理解するためにもこのような実証研究を続けたいと思います。病院では24時間の搬送業務が必要となる部署が多々あります。今、人手不足の為に夜間の人員の確保は困難を極めます。病院の24時間体制を維持する為にはこのようなロボットが必要です。更に、この技術は色々な搬送の現場での活用ができます。高齢化社会の中での活用も考えて行ければ良いと思っております。

最後に本年度の目標を紹介いたします。今年の病院目標として1. がん診療体制の整備、2. ゲノム医療体制の構築を掲げています。社会的にも大きな認知を得たこの方針を受けて、がんゲノム医療中核病院の選定が進みつつあります。名大病院は是非ともそれに選定されるように内部の整備を進めています。がん診療体制にがんゲノムという新しい考えを導入することにより、一層の診療体制強化を行います。又、ゲノム医療体制はいわゆる“精密医療 (Precision Medicine)” を全ての疾患に対して実行するためには欠かせないものです。疾患をより少ない副作用で効率よく治療することは重要です。又疾患のリスク評価にもこの考えは重要です。遺伝子の解析結果を利用して、疾患の本質に迫る治療を行うことができる時代の到来を期待しています。医療としてはまだ道半ばですが、一方で臨床に役立つ結果も出揃いつつあり、新たな治療体制として本年中に整備を進めてゆきた

いと思います。

最後になります、学友会の皆様の従前にもましてのご支援、ご鞭撻を改めてお願いする次第です。以上簡単

ですが新年の挨拶とさせていただきます。



新年のご挨拶



時報部長 きっかわ 吉川 ふみたか 史隆

新年あけましておめでとうございます。時報部長として新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は東芝の粉飾決算に始まり、神戸製鋼問題、日産とスバルの無資格検査問題など、日本の品質管理を問われる事件がありました。第3勢力の台頭で産業界の厳しい状況は理解できますが、日本の進むべき道はより良い製品の開発と品質管理であろうと思います。医療の世界では安全性は最優先の課題であり、産業界も安全性や品質管理には十分配慮して頂きたいと思います。政治的にも籠池、加計問題もあり、一昨年までの自然災害とは異なる事件の多い年でありました。

過去には「研究大学」や「卓越大学院」など、数々の称号と資金を得てまいりましたが、昨年は残念ながら「指定国立大学」に選ばれませんでした。しかし、再チャレンジしておりますので、今年は認められるのではないかと期待しております。毎年のように文科省が新しい称号の企画を考えますが、学友会の皆様のご支援の下、全てにチャレンジし獲得してまいる予定です。学友時報ではこれらのイベントを漏れなく記事にしておりますので、本年もご愛読のほどよろしくお願い申し上げます。

平成27年より準備を開始し、一昨年にはアデレード大学（オーストラリア）とのjoint degree programがスタートしております。昨年も4月からルンド大学（スウェーデン）とのjoint degree programが開始され、本年4月からはフライベルグ大学（ドイツ）との協定もスタートする予定であり、ますますグローバル化が進んでおります。

「名大医学部学友時報」を振り返りますと、「退職教授」「教授就任」「学友会大会開催」等が表紙を飾っております。総合診療医学の伴信太郎教授と総合医学教育センターの植村和正教授が退任されました。伴先生は長きに渡り名古屋大学医学部の発展に尽力され、特に、学生教育の中心となってご貢献していただきました。植村先生には学生教育だけでなく卒後教育（研修医教育）を

中心にご活躍頂き、名大の関連病院を含む卒後教育にご尽力いただきました。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。新たに腫瘍生物学（旧分子病態）の近藤豊教授と国際医学教育学の柏谷英樹教授の2名が就任され、名古屋大学医学部の発展に貢献していただいております。

学友大会は第108回を数え、消化器内科学の後藤秀実教授が大会長を務められました。記念講演として日本医療研究開発機構の菱山豊先生に「日本医療研究開発機構のミッション」とのタイトルで講演をしていただきました。

学友時報では「研究トピックス」や「Hot Science」として、最新の知見を掲載しています。また、准教授就任、学友会構成員の院長就任「新病院長に聞く」等の最新の人事情報や「西医体結果報告」、「支部だより」、「クラス会だより」等の構成員の近況報告等盛りだくさんの内容を含んでいます。各方面でご活躍の先生の「十医者十色」や「懐かしき日々」も楽しい記事だと思います。

各学会の専門医を統括的に認定する専門医機構は紆余曲折を経て、学会により時期は異なりますが、2018年より順次スタートしています。全体的には専門医制度は、各学会の意向を組み入れて柔軟に対応されていくものと思われませんが、現状よりは厳格になり、ハードルが上がることになると思います。また、行政からの要望も強くありますが医療界のプロフェッショナルオートノミーに期待したいと思います。

我々時報部としては会員の親睦を図り、情報交換の場としても学友会時報を利用していただければ幸甚です。また、大学を離れましても、学友時報を愛読して頂き、学友会の絆を繋ぐ役に立てれば望外の幸せです。時報部の記事は学生が主体となり、立案、取材等を行っております。本年も学友会の皆様からの暖かいご支援とご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。